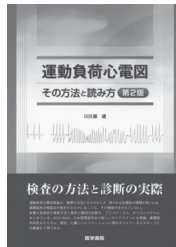


書評

[評者]

牧田 茂

埼玉医大国際医療センター
心臓リハビリテーション科
科長



運動負荷心電図 第2版

その方法と読み方

川久保清 著

B5 頁184 2010年

定価 5,250 円(本体 5,000 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-00873-0] 医学書院刊

川久保清先生執筆の『運動負荷心電図 第2版』が発刊された。本書は川久保先生のライフワークともいえる心電図学と運動循環器病学の集大成である。2000年に刊行された初版は多くの関係者に読まれたものと思われる。

循環器領域における運動負荷試験は、かつて大学病院でも運動負荷研究班があったほど隆盛を誇っていたが、今日徐々に研究の対象になりにくくなってきており、そのことは大変憂うべきことである。また、臨床的にその重要性が薄れたわけでは決してないにもかかわらず、運動負荷心電図に焦点を当てた専門書がほとんど刊行されなくなってきており、そういった意味で本書の果たす役割は非常に大きいと考える。第2版の発刊を私同様心待ちにしていた方も多いと思われる。

第2版は、184ページと若干ページ数が増えているものの、定価は5,250円(税込)と初版の4,700円(税抜)とほとんど変わらず、コメディカルにも購入しやすい価格となっている。紙質はより薄く良質となり字が大変読みやすくなっている。また、新たに2色刷りとなっており、大項目や図表などが見やすくまとまっているのもうれしい限りである。

第2版の内容は読者の意見を参考に、例えばサイドメモを大きく割愛したり、ACC/AHAや日本循環器学会のガイドラインに準じた内容、さらには心臓リハビリテーションに関する項目を取り入れるなど、最新の情報が盛り込まれている。これを読めば運動負荷心電図に関するわが国の標準的な知識はもちろんのこ

と、エビデンスや専門的な内容にも触れているため専門医であっても十分満足できるテキストとなっている。

初版と比較しながら読んでいくと、新たに登場した項目が多いのに驚く。例えば、負荷心エコー、PCI後の負荷試験、冠スパスム、Brugada症候群、QT延長症候群、弁膜症、ペースメーカといった専門用語の解説が加筆されている。これらは初版以降循環器領域でトピックになった項目であり、随所に川久保先生の細かい配慮がうかがわれる。

あえて言わせていただくとすれば、運動負荷試験における緊急時の対応面で、緊急薬品や配備すべき器具についての記載が足りないことぐらいではないだろうか。また、わが国における運動負荷試験の状況(実態調査)内容が、1994年の調査をもとにしているため古い内容になっていることも残念である。しかし、これは日本循環器学会や日本心臓リハビリテーション学会等が指導力を発揮して、川久保先生を中心にわが国の運動負荷試験の実態調査を再度実施してくれることを切望する次第である。

先ほども述べたが、近年運動負荷心電図に関する詳細なテキストが発刊されていない状況下、本書はこの分野で唯一の専門書といっても過言ではない。運動負荷試験を担当している循環器科やリハビリテーション科の医師のみならず、リハビリテーションに携わる理学療法士、作業療法士や看護師、臨床検査技師はもちろんのこと体育系の運動指導者にもぜひとも読んでいただきたい良書であることを保証する。